

# 「読む」授業における一つの試み

— 芥川龍之介の『藪の中』の実践報告を中心に —

世 良 馨 子

## 一、「藪の中」まで

昨年度、福山商業高等学校に転任した私は、前任校とのあまりの違いに、教室で立往生であった。授業中であるにもかかわらず、生徒が廊下やペランダでおしゃべりをしていたり、トイレにすわりこんでパンを食べていたり。授業をしていると、他のクラスの生徒が入って来て遊び始める。教室にいる生徒たちも、それぞれに楽しんでいる。テレビやラジオの話から、身近な出来事など、おしゃべりの種は一日中話していても尽きないらしく、私語は止まない。トランプや将棋・ゲームなどに熱中するグループもある。飲食は平気でしているし、ウォークマンで音楽を聞きながら授業を受けている生徒もいる。静かだなあと思うと、寝ているか漫画を熱心に読んでいるかである。あまりにも平然とやっているの、注意したものかどうか、そのようなことから判断にとまどった。もちろん、真面目に授業を受けたいと願っている生徒はいる。しかし、残念ながら、本校

に入学する生徒の理由は、総合選抜校（普通科）に入れないからとか、総合選抜校で苦労するより福山商業高校で遊びたいからとかいうことが大半である。したがって学力や意欲が低い。そのような生徒を前にして、私の授業はまさにひとり相撲であった。生徒に、めんどくさいという感情以外、何も感じさせていないのではないか。そのような無力感と情けなさを味わっていた。

そのような気持ちを決する工夫もつかないまま、二期を迎えた。特に三年生は就職試験も終わり、どうしたらいいのかと途方にくれた。そのとき、茨木のり子の「りゅうりえんれんの物語」が目についた。集団読書のテキストとして図書館にあったものである。私は、前任校で平和教育ロングホームルームの資料であったこの作品を読み、たいへん心打たれたことを思い出した。苦肉の策であった。とにかく読ませてみようと思ったのである。

教室に持つて行って生徒に配布したとき、三分の一ほどの生徒がすぐに読み始めたのには驚いた。「なに、これ？」

「こんなん、読めえゆうん？」と言ってとりかかれないうでいる生徒のところへ行つて話をする。「一行が短いから、すぐよ。とにかく三ページ読んでごらん」と促すと、しぶしぶながら読み始める。「意味がわからん」といつて投げ出す生徒には少し解説を加えてやる。「第二次世界大戦ころの話だね。むりやり日本に連れてこれながら、彼は奥さんのことを思い出しているんだね」と。次第に教室は静かになっていった。ひざを抱くようにして読む生徒や机の上になうつぶして読む生徒など、姿はさまざまであり、決してお行儀がよいとはいえない状態ではあった。だが、ひとりひとりが劉連仁とともに逃亡の生活に入っていく雰囲気になっていった。彼らが、このように素直に読むとは思っていなかったたので、たいへん意外であった。「これ、ほんまにあつたことなんじゃなあ」と、思わずつぶやく生徒もいた。最後まで、読むことにとりかかれなかつたある生徒は、「時間内に読めんかつたけえ、持って帰つて読んでもええ？絶対、絶対返すけえ」と言つて持つて帰つた。感想文には、劉連仁の生命力の強さに感動し、彼の帰国を喜ぶものが多かった。また、日本や日本軍の行為を怒り、恥ずかしく思う気持ちを書いたものも多かった。

そのような生徒達の姿を見て、私は、それまでの自分の授業を反省した。今までの私の授業は自分の解釈や指導書の解釈へいかに近づけていくかとか、指導書に書かれている正解(?)をいかに出させるかとかいうことばかりを考

えていたのではないだろうか。そうすることで、生徒の読む意欲や読んだ後の感動をどれほど殺いでいたのだろうか。

本校の生徒のほとんどは、卒業後に就職をし、日々の仕事に追われていく。ゆつくり本を読むこともなくなると思う。できることならば、話の展開にワクワクしながらページをめくつたり、登場人物の言動を通して自分自身の問題を考えさせられたり、読書後の感慨(さわやかなものであるにしろ)、不愉快なものであるにしろ)が心にしみていくのが快かつたりする、そんな体験を一つでも多くして卒業してほしいと思うようになってきた。

昨年度は、先ほど挙げた茨木のり子の「りゅうりえんれんの物語」から始まり、赤川次郎「女学生」より一編、筒井康隆「家族八景」より一編、河野美代子「さらば悲しみの性」、太宰治の「きりぎりす」、安部公房の「棒」、夏目漱石の「こころ」抜粋(教科書に載っていたもの)などを読ませた。今年度は、それに加えて倉橋由美子の「倉橋由美子の怪奇掌篇」より三編、灰谷健二郎の「子供の目」より二編などを取り上げた。「棒」と「きりぎりす」は学習プリントを用い内容を読みとつたが、他のものは一時間のなかで読んで感想文を書き、提出するだけの授業であった。教材を選ぶときに留意したことは、ページ数と内容とである。生徒の読む速度には個人差があるので、どの程度の量にするかというのは難しい点である。だいたい、二十分から三十分で読める量、文庫本で三十ページくらいのもの

を選んだ。内容は、漠然とした表現であるがやはり感動的なものを読ませたいと思つた。生徒達が抱えている問題に触れているかどうかも考慮した。具体的に言えば、大人や社会の矛盾を指摘している内容や、友人・男女・親子などの人間関係を扱っている内容や、人間の内部にある醜さや美しさを感じさせる内容などである。生徒達は、漢字が読めなかつたり、語彙が少なかつたことばの意味がわからなかつたりするので、本を読みたがらないということはわかっていた。だが、教材の選択において、語句や表現の難易はあまり気にしなかつた。よみがなをつけ、語句の意味を書きこんで印刷することで、いくぶんかは解決できると思つたからである。

毎回、すべての生徒が熱心に読んでいたわけではないが、「今日は読まんのか?」「今度はどんなん読むん?」と興味を示す生徒が増えてきた。最初はなかなかペーじをめくれないかつた生徒の中にも、回がすすむにつれてあきらめたのか、すぐ読み始める生徒が現れてきた。一方、いつさい読もうとしない生徒が固定しはじめた。彼らは、大きな声でおしゃべりをするとはできないようであるが、小声で話したり、他教科のノートを写していたり、寝ていたりしていた。このような生徒になにかできないか。また、真面目に読んで書いてくれている感想文を、私が目を通して返すだけでなく、なんとかできないか、という思いが募つてきた。

生徒ひとりひとりが自分の課題や興味を持って読みながら、自分が考えたことをクラスメイトの考えと比較・検討して深めていくことはできないだろうかと思うようになった。そこで、三年生の授業が残りわずかとなつた一月ではあつたが、芥川龍之介の『藪の中』をとりあげ、ささやかな試みをした。以下、その報告をさせていただきたい。

## 二、授業の実際

『藪の中』の推理小説的な設定は、生徒の興味を惹き付けると思つた。最後まで集中力が途切れず、読みきつてしまふ醍醐味を味わらせることができるのではないかと考えた。そして、ひとりひとりの証言のことばのはしはしに、追いつめられた人間の、最後の最後にめぐり出されるエゴイズムが表れている。内容的にも文章的にも難しい作品であるとは思つたが、生徒達はその醜さを直感的に感じることができるとはではないか。「なんか嫌だ」「うさんくさいぞ」という感性を活かし、そこから「人間」について考えさせていくような授業は展開できないものだろうか。そのような考えから、今回の授業を計画した。対象は三年六組・七組の二クラスである。

『藪の中』を生徒に読ませるにあたってはいくつかの課題がある。

まず第一に、よみ方の難しい漢字が多く、意味のわかり

にくい語句が多いということである。生徒の中には、漢字が多いから読みたくない、という者が少なくないことが今までの授業からわかった。そこで、既によみがながついてる漢字の他に、次のような字によみがなをほどこした。

〔「檢非違使に問われたる木樵りの物語」〕「檢非違使に問われたる旅法師の物語」〔「檢非違使に問われたる放免の物語」〕「檢非違使に問われたる蠅の物語」の中のものを例として挙げる。

隔った 水干 都風 乾いて 太刀 致した 参ろう  
丈 存じません 帯びて 携えて 殊に 塗り 畜生 因縁 都 国府 侍 遺恨 劣らぬ 因果 行方 尋ね 憎い

注は行間に入れた。正確な注釈ではないが、文脈に逆らわないよう配慮した。

檢非違使(昔の刑事) 四、五町(四、五百メートル) 縹(水色) 水干(上着) 蘇芳(深紅) 一体(ちつとも) 四寸(一メートル三〇センチ) 沙門(法師)

箆(矢を入れるカゴ) 如露亦如電(露やかみなりのようにはかない) 放免(警官) からめ取った(つかまえた)

初更(八時か九時ごろ) 佩いて(身につけて) 畜生(馬のこと) 洛中(京都の町) 女房(女性) 御詮議(お調べ) 媼(老女) 手前(私) 片づいた(結婚した) 若狹(京都府の北部) 遺恨(うらみ) 姥が(老女)

次に、各証言をつないで考えさせるにはどうしたらよいか、という課題がある。それぞれの証言を別の話として受けとめる危険性がある。学力が低い生徒ほど、そうである。そこで、全体を一度に読ませるのではなく、前半〔「檢非違使に問われたる木樵りの物語」〕「檢非違使に問われたる旅法師の物語」〔「檢非違使に問われたる放免の物語」〕「檢非違使に問われたる蠅の物語」と後半〔「多襄丸の白状」〕「清水寺に來れる女の懺悔」〔「巫女の口を借りたる死靈の物語」〕とに分けて読ませることにした。

最大の課題は、「犯人は誰か」という興味から、いかに登場人物の心理や内面へ目を向けさせるか、ということである。そのため、「嫌だ」とか「うさんくさい」とか思った表現や言い方を具体的に抜き出させ、それを口にする登場人物の心理に迫る手がかりとさせた。ここで、クラスメイトの考えの中で、内面や心理に考えが及んでいるものを選んで提示していきながら、「犯人探し」を乗り越えていこうと考えた。

授業は五時間で計画した。一時限目は絵で「水干」「牟子の垂衣」などの説明をしたあと、前半を読ませた。読み終えた生徒の反応は、「もうこれで終わりなん？」というものが多かった。中には「なんなんこれ」という生徒も少なくなく、一つの事件をめぐる、四人の証言であることがわかっていない生徒もいた。この時間は、特に説明はせず、前半を読んでわかったことを個条書きにさせた。死骸が発

見された現場の様子はよくわかっていたが、死んだ男は武弘で、女を連れており、その女の名は真砂、この二人に盗人の多襄丸という男がからんで事件が起こったということ把握できていた生徒は、クラスの三分の一ほどであった。やはり、各証言を関連させて考えるということ、三分の二の生徒はしていないことがわかった。

二限目は、一斉授業で、四人の証言からわかることについてまとめた。特に事件に関わった三人の名前とその関係について確認し、今から読むのはその三人の告白であることを話してから後半を読ませた。生徒は、話の展開がどうなるのかと興味を持っていたのであろうか、すぐに読み始めた。たいへん熱中していることが、クラス全体の雰囲気から察せられた。だが、読み終えたあとは、「なに、これ、よーわからん」という声があがった。直後の感想として、これは全体を代表したものであると思う。

三時限目には、「清水寺に来れる女の懺悔」は真砂の告白であること、「巫女の口を借りたる死霊の物語」は武弘の告白であることを確認し、それぞれ「多襄丸の白状」の途中から話し始めていることを確かめることから始まった。そして、「多襄丸の白状」「清水寺に来れる女の懺悔」「巫女の口を借りたる死霊の物語」のうち一編を選び、その証言から気になる言い方・表現を抜き出させた。同時に、どうしてその表現が気になるのかという理由が書けたら書いてほしいともつけ加えた。多襄丸を選んだ生徒は十九名

(男子八名、女子十一名)、真砂を選んだ生徒は三十六名(男子三名、女子三十三名)、武弘を選んだ生徒は十二名(男子三名、女子九名)であった。一人の証言に絞って読みとらせることにしたのは、矛盾する三人の証言を並べて読ませると、生徒は何を考えるのかわからなくなり、混乱するのではないかと思ったからである。女子で真砂を選んだ生徒が多かった。三年七組の生徒が挙げた「気になる言い方」を資料1に示している。

四時限目には、「多襄丸」「真砂」「武弘」それぞれについて、右側は「クラスメイトが挙げた気になる表現とその理由」を載せ、左側には罫線を引いたプリントを作成した。そして、クラスメイトが挙げた表現に傍線をひきながら自分が選んだ人物の証言を読み返し、「なぜ多襄丸(真砂のプリントは真砂・武弘のプリントは武弘)はこんなことを言ったのか、私の考えー多襄丸(真砂・武弘)の心理ー」を左側に書くように指示をした。ここで「心理」について考えるように働きかけた。三種類のプリントをつくるために手間がかかったが、「私のプリントはどれ?」「みんな違うんじゃない」という反応があり、課題に前向きに取り組む生徒も少なくなかった。

五時限目は、前時に提出されたものの中から数編を選び、プリントにしたものを配布した。資料2である。特に、真砂に対して鋭い非難が集中した。多襄丸や武弘の心理について書いたものの中には、「実は真砂が犯人だが、真砂を

愛しているからかばっているんだ。」というものが少なくなかった。しかし、真砂の心理については、その醜さやいやらしさを感じとり、述べたものが多かった。資料2のJの文章は男子である。このように真砂をかばっていたのは彼だけであった。(他の男子は提出しなかった) 彼の生徒は、被害者の位置に立っている真砂の本性を見抜いていた。「多襄丸の心理」にしても、「武弘の心理」にしても、数は少ないものの、彼らの表現をとらえて本音に迫ろうとしたものがあり、そういうものを選んだ。

本時は、そのプリントを読み、クラスメイトの考えを比較しながら、「藪の中」のテーマ(芥川龍之介は何を表現したかったのか)を考えてみよう」という課題を出した。「テーマなんかわからん」という生徒もいると思ったので、「私の感想」をまとめるつもりで書いてもよいともつけ加えた。また、次の五つの書き出しを例として出した。

「初めて読んだとき、く」

「読みすすんでいくうちに、く」

「みんなの考えや他の登場人物について読むうちに、く」

「この小説で作者が言いたかったことは、く」

「自分のことや周りの人のことを考えてみて、く」  
これが最後の課題であったが、「まだ、この話自体がよくわからんわあ」という生徒もおり、そういう生徒のところへ行って話し合いながら授業をすすめた。その話の中でわかったことであるが、そういう生徒は、まだ続きがあっ

て、武弘が死んだ経緯がわかるものと思っている生徒であった。そこで繰り返し「この小説はこれで終わり。犯人を考えるのではなく、登場人物の心理について考えてほしい」ということを言う必要があった。

生徒が書いたものの中から代表的なものを五つあげてみる。

みんなの考えは、ほとんどが三人の態度を批判したものがかりでした。真犯人は誰かを書いてないからつまらん。どれが違ってどれが当たっているということはないけど、AからRまでを読むと、「あーそーかもしれない」と納得する部分がありました。特にCとJが気に入りました。初めて読んだときは推理小説で面白そと思っただけど、犯人は分からないし、国語の課題で苦しめられて、ぜんぜん楽しくありませんでした。この話の作者の芥川龍之介さんは、いったいどんなテーマで何を表現したかったのでしょうか。おじさんの考えることは分かりませんが、三人のうち二人が一人をかばっているのは確かです。なぜかばう？何か特別な感情から？でも、かばわれてもその人は罪のつぐないをしないと気持ちがいけません。みんなの考えや登場人物のことを読むうちに犯人は真砂かな、と思いました。

このレポートは、「犯人は誰か」から視点を変化させることができなかつた生徒のものである。この他にも、「犯

人がわからんとすつきりせん」と書いた生徒や「結局わからない」と書いた生徒が四分の一以上いた。また、「かばいあっているんだ」と考え、「悪いやりの心について書いた小説だ」と述べた生徒も、特に七組に十名ほどいた。最後まで表現に注目させられなかったということだと反省している。

次に、考えが変化したと書いていた生徒のレポートである。

初めて読んだとき、何が何だかわからなかった。事件が起こり犯人が分かって、なぜそうなったのか？ だったらただの推理小説と同じじゃないかなあと思った。でも、先生がそんな小説を読ませるだけじゃないなあと思った。でも、読み進んでいくうちに、何だか自分と、登場人物をくらべてしまい、どうしてそんな事を言うの？ と思ったけど、やっと分かってきたと思う。みんなの考えや他の登場人物のことを読むうちに、なんだかかなしい気分になった。この小説で作者は、人間のあはれ、物のあはれ、人のもろさ、人の勝手をいいたかったんだと思う。自分の事を考えてみても、登場人物と同じだろうなと思った。人を気づかう気持ちはあるが、やっぱり自分を正当化してしまう。人間はやはり、弱い生き物だな、と思った。

これは、資料2のJを書いた男子生徒である。授業時間、

いつもひとりで考えこみ、私が話しかけるたびに、「わからんよー」と言っていた。自分で悩みながら自分なりの答えをつかんだ生徒のひとりである。

初めて読んだときは、なにがなんだかわからんままいやになつてよまんかったけど、先生にあらすじみたいなものをおしえてもらって読んだら、なんかこの話はおもしろかった。読んでいたら、犯人は真砂だと思っていた。でも真砂は自分で悲劇のヒロインぶってるだけで、犯人じゃないし、よくもまあこんなにかわいこぶりっこしているなあと思った。この作者は人の心の悪い面などを「こうだ」みたいなことをいいたかったんだと思う。なんかよーわからんけど、たぶんそうだと思います。

この生徒は最初、全く読む気すら見せなかった。四時限に話をして、やっとこの小説の組み立てを理解した。そしてそれからは意欲的に課題にとりくみ始めた。前半と後半に分けて理解し易くしたつもりではあったが、やはり一対一で話す必要がある生徒もいるのである。

次に、真砂のことを考えながら、最終的に人間の本性に迫っていったレポートを二編あげてみたい。

初め読んでいくうちには他人のせいにはせず、自分が殺つ

たなんて深く見えるけど、読みすすんでいくうちに、三人は三人とも何だかんだいって自分には有利になるように、人に同情をかつているように思う。結局は自分が一番大切に、一番かわいいんだと思つてゐるんだと思う。ほんとに好きな人がいても、表面的にはかばつてみせるけど、本当に追いつめられたならば、言葉の中に本性が出て、自分をかばつていくものだと思う。でも、それは女の方が激しく持つてゐるもので、真砂なんてもう自分は犯罪者なんかではなく、悲劇のヒロインになりきつてしまつてゐるのには、女のこわさを見た気すらした。

芥川の作品は、けっこうむずかしいものが多い。今回もそうだし……。思うに、三人は三人とも本当の事を言つてゐると思う。他の人から見れば「ウソ」かもしれないけれど、本人にとっては本当なので「真実」とか「ウソ」とかは関係ないと思う。でも、その「本当」は自分を守るもの。自分は悪いことをしてゐるんだけれど、でも、自分は正しい事をしてゐたんだという「ウソ」の「本当」だと、私個人は思う。

前者は、直観的にこの作品のテーマをとらえた生徒の代表例である。前の課題（「なぜ真砂はこんなことを言つたのか、私の考え―真砂の心理―」）のレポートは1である（資料2）。真砂の身勝手さを手がかりにして、ストレー

トに、登場人物の内面を読みとり作品のテーマをとらえた例であると思う。

後者は読書量の豊富な生徒である。前の課題に対するレポートは1である（資料2）。このように深く考えた生徒は彼女を含めて二名しかいなかった。だが、いかなる場合でも生徒を侮つてはよい授業はできないことを再認識させられた。

### 三、反省と課題

第一に反省する点は、時期の設定である。自動車学校の集団入校の時期と重なつたため、授業に出られない生徒が少なくなかつた。また、学科試験の日などの授業では、そのための勉強を熱心に行つており、授業に乗つてこない生徒もいた。一時限目、二時限目で授業を聞いていなかった生徒は、結局最後まで何をしてゐるのか、どういふ話なのかわからなかつたようだ。もつとひとりひとりの進度を見ながらの、きめ細かい指導の工夫が必要であつた。

また、「犯人は誰だ」という興味から登場人物の心理や内面の興味へと移つていかなかつた生徒が、全体の四分の一以上いたということがある。最大の課題としてわかつていながら、克服できなかった。多襄丸や真砂や武弘の心理を考えながらも、「結局、犯人は誰なんだろう」というところへ戻つてしまう。物事が解決しない話を読み慣れてい



ないからだろうと思う。「藪の中」をとり上げる前に、豊かな読書経験を積んでいく必要があると感じた。

本年度（一九九〇年度）一月における、三年生対象の『藪の中』の授業について報告させていただいた。正直に言えば、明確な目標があるわけでもなく、今の授業をなんとかしたい、という焦りにも似た思いからこの授業を展開した。本稿を書きながら、何度も、「お断りしよう」と思っ  
ては、「今さらそんなことはできない」と勇気をふるい起こした。「こんなものでよいのだろうか」と思うこともあったが、「ひとりの七年目の教師が、何に悩み、何を考え、どうしたのかを報告させていただき、相談させていただくのだ」と思って筆をとり直した。まだまだ配慮や工夫が足りないため、生徒の力を十分引き出せていない実践であった。本稿を読んでお気づきになったことを、是非ご指導いただきたい、と願っている。

（福山商業高等学校教諭）



「巫女の口を滑らしたる死霊の物語」

|  |   |   |   |
|--|---|---|---|
| <p>○「巫は毒を手のひらにすく、く聞えてのりよは見えだ」</p> <p>○「毒は毒を手にすく、く聞えてのりよは見えだ」</p> | <p>○「毒は毒を手にすく、く聞えてのりよは見えだ」</p> <p>○「毒は毒を手にすく、く聞えてのりよは見えだ」</p> | <p>○「毒は毒を手にすく、く聞えてのりよは見えだ」</p> <p>○「毒は毒を手にすく、く聞えてのりよは見えだ」</p> | <p>○「毒は毒を手にすく、く聞えてのりよは見えだ」</p> <p>○「毒は毒を手にすく、く聞えてのりよは見えだ」</p> |
|--|---|---|---|

多襄丸の心理 — 私の考え —

A 多襄丸は自分を正当化しようとしてゐる。自分が武弘を殺したことは認めても、その自然のしかたにはくぬげがある。二合切りむすんだ者がいない、という事は相手が強かつたと強調してゐる。そして、その武弘に勝つた自分は、それ以上に強いんだとまがりて自分で優劣な人間でありかのように言つてゐる。また夫婦のだから真砂が武弘を殺してくれといふ、と言つてゐる。つまり、自分が殺さうと思つたわけではない、やはり自分を正当化しようとしてゐる。

B 多襄丸はたぶん本當に武弘を殺したんだと思つ。それで、せめては自分の好んだ、だから連れて逃げようと思つたんだと思つ。でもへんだ「男を殺したくな」と言ふたり、「男の命はとらない」と殺すつもりはなかった。なつて、ほんじ前さうなことを今言つたこととせせん違ふ。才信ととら。極刑になるのは本當は情にくせに、いかにも、覚悟は決めた、あどつちでしてくださ。打ち首にでも書かイスに下し……。一みだ、な感して、しまが、てりや。とにかく、絶對、多襄丸は武弘を殺して自分の名のみんに知られて、日本一の大家と名を馳せたいと思つた。うやうやした、といふ。まあ、この世に名を残したい、といふ望みと、いふか、おんばのあかんと思つ。

C 多襄丸、その盗人は、私から言ひやせと、とちぢな人間で、かぎ大判に、なりたか、てい、うは、の、よ、う、な、ヤツ、で、考、え、こ、の、と、ん、ど、か、他、い、ふ、で、私、が、殺、人、だ、と、い、ふ、ま、ど、も、に、話、を、聞、い、て、い、ら、れ、な、い、思、つ、ま、す、今、ま、さ、い、ら、ん、所、で、用、い、ま、う、な、事、件、を、起、こ、し、て、い、ら、る、で、じ、う、せ、打、首、獄、門、だ、う、セ、ウ、犯、し、て、金、品、を、取、ら、だ、け、で、は、か、こ、ら、つ、の、な、い、で、ま、し、や、男、を、殺、し、た、の、を、知、つ、て、ま、も、自、分、が、殺、し、た、よ、う、に、言、つ、た、の、で、し、う、か、悪、人、の、世、界、で、は、

と卑劣なことをすれば、格が上がるのであります。多襄丸の昔白文を読んだ時に、「これは犯人にならねえ」と思ひました。

D 多襄丸は、真砂が好きになり、この人を妻にしたいと思つた。だけれど、真砂が武弘を殺してしまつた。だから好きな人を殺人犯にはしたくないので、他人にはもともと人を殺してもおかしくないような男に思われていり、自分で自分が武弘を殺したとウソをついて、真砂をかばつたんだと思つ。

E 彼の自然で強調されていくことは、「年、い、色、欲、は、な、い、し、い、う、こ、と、と、ま、さ、う、な、殺、し、方、は、し、て、い、け、い、し、と、い、う、こ、と、だ、と、思、つ、女、好、き、で、ス、ク、で、終、局、高、ら、落、ち、て、つ、か、ま、つ、て、ま、う、ト、ジ、ロ、や、つ、な、ど、と、思、わ、れ、た、ら、わ、た、し、も、多、襄、丸、で、ま、す、な、ん、て、ソ、ウ、盗、人、の、は、こ、り、や、な、ら、い、な、も、の、は、ど、こ、へ、い、つ、ま、う、だ、ら、う、か、本、氣、で、ま、を、妻、に、し、た、ら、と、思、つ、た、か、ら、ラ、イ、ム、ル、と、決、闘、し、て、正、々、堂、々、と、勝、つ、た、と、い、う、方、が、カ、コ、イ、エ、と、思、つ、だ、か、ら、ウ、ソ、を、つ、つ、た、

② 武弘を殺したのは真砂で、彼は真砂をかばつてゐる。とも思つた。けれど、真砂をかばつてゐるのだから、女が夫を殺してくださリッと言つたから、それまでには殺す氣はなかつたが、もつてせと殺す氣にはなつたと言ふのがあると思つ。自分が妻にしたから、自分が考え、決闘したと言ふんではいいかな。この多襄丸の言ひだは、殺人の責任を、キル(いやれ)で、真砂にもたせてゐるのみだ。だから、これでは真砂をかばつてゐることにならぬから、①の方がだと思つ。

真砂の心理 — 私の考え —

F. 本当は、武私を殺してないと言いたいような気がする。本当のことはどうかわからないけど、自殺しようとしてるんです、今生きているので、はなから死ぬつもりがなかったんでは……。夫の目か〜という言葉が出てきたのは三度目だし、その水子の甲におそわれり前に、もう夫は死んでいたのかも知れない。

G. 小つう、今こめにこれを殺すべき人物は細の水子と着た男だと思ふ。(中略)なんかにいうんは感想(文を説く)と、真砂はうぬぼれてると思ふ。最後の最後まで、自分を夫を殺したけど、それは罪にばかりの手こめられたからよ……。と涙ながらに訴えてる。なんかに、これはおかしー、自分は何様のつもりだ？ 説むうちに、この真砂の考え方はおかしいと思ふ。小つう、愛する夫を殺す。その前に自分が死ぬ。そして夫に殺してもらふのか小つうだと思ふ。

H. 自分は多量に今こめにこれを、なつかう。夫にまで見放され、むづせまくいく気が、え残ってない。世の中で一番かわいい女だと思われたい。夫を殺したのは自分だけ、殺さずにはいられないほど自分ばかりの立場にいたのだと思われたい。以前は、いまだ今で愛してゐる夫に冷たい目とされ、とてもらふこととしてゐる。自分も夫のこゝろを愛してゐるが(手当は愛するもの)、これから生かすことも夫の冷たい目からいらい、そして私と一緒に死のうと言つたら夫が「殺せ」と言つたので、自分の夫への最後の愛文として、夫を殺してあげて、自分が死のうと思つたが、さうは、と思つてやうとしてゐる。

I 真砂は何でも自分の都合のいいように解釈してゐる。それで、いつも肝腎なところが点を失つてしまふ。それに夫の目の目、何があつても夫の目かどうとか言つていふけど、これは単にはずかして、みじめさのあまり誇りに思つてゐるだけだと思ふ。——中略——真砂は、と悪いおの激しさと、人に情けをかけたおの、なんてかわいそうな人なんだと思つてもらふとこんなことを言つたんだと思ふ、本当に自分かわいそうな女なんだ、自分で悪い込んでゐるのかも知れない。

J みんながみんな、本当のこゝろを少しづつ言つてくような気がする。本当のことばかりではないけど、二人がお互いにかはり合つていふような気がする。——中略——夫を悪く言つて、自分を悪くして自分か殺したように言つていふが、本当は殺してない。どちが犯人かわからないけど、二人とも好きだったこの人は、自分でや下と言つてしまつた。

K 自分が今こめにされたうしろめたさから、「やだ」と言つたんだ、冷たい先に見えんだと思ふ。(中略)夫の目か同じ言つた瞳で、いさう憎しみをつくるので、自分の罪でなく夫がわかれたい。

L 同情をかかゝるんじやないかな。夫を殺すまれて、それで殺してしまつた。さうしてそればかりの態度して、罪ばかり軽くなんぞないかな……。女は腹ぐらゐいと女の私と思ふ。

## 武弘の心理 — 私の考え —

M. 武弘が言つてゐるを見たと、まことに武弘を哀れ切つた。でも前の証言には男より勝氣なやうなところ、そのまにみか、武弘は幸も信じて裏切られて、とるにたのだから、なんで自分から死んだやうのだから。妻をかばつて死んだらうか。でも妻が許せない、いふこともさうか。これも妻を愛するあまりなんだから。でも、三三三妻を悪者にして、かばつて死んで死ななうか。盗人の罪は許してやりたい。でも、真砂の罪は許さなうか。では、妻をかばつて死んだらうか。うらみがあるなら、かばうはずがない。こんな妻を見て、妻に殺されぬなら自分で、と思つたのかなあ。

✓ 武弘は、男として人に殺されたんだというところは、プライドの許さなう。たのんじてないかな。それより深く自殺した方が、こがつかうと思つたのだと思う。

○ 彼は、武弘が「自殺して自分で死んだ」と自決したのは、幸ひだと妻を殺しても、多分、武弘はやさしい人だつたので、自殺したという妻をかばつた。(とも考えられぬ)

P 武弘の告白は、い、けん妻をかばつて、いりうに、聞、こえりければ、五人の口から出たことは、殺せても、妻の口から出たことは、殺せないと言つて、かど、か、あ、り、な、い、か、め、ら、ず、武弘は自殺したと言つたのは、自分から死なうことによつて、真砂が本當のことを言つてくれり、こにかけて、死なうたのではないかと、思、ひ、お、そ、う、でも、そう、も、言、う、と、言、砂、が、苦、し、み、と、思、つ、た、の、の、し、れ、な、い、。

⑧

Q 武弘は妻を愛してはなかつた。だが武弘自身は妻は自分を愛してくれて、と、思、つ、て、い、た、だ、け、と、武、弘、を、殺、し、て、く、た、と、盗、入、に、言、つ、た、う、ら、み、を、受、つ、た、思、つ、た、だ、け、と、武、弘、を、殺、し、て、く、た、と、盗、入、に、言、つ、た、心、の、ど、ろ、で、自、分、の、う、ら、み、は、な、い、と、武、弘、は、妻、を、愛、し、て、い、た、こ、と、を、改、め、て、死、つ、た、だ、か、そ、ん、な、自、分、の、思、ひ、を、認、め、な、く、な、う、か、妻、に、う、ら、み、を、受、つ、た、の、を、現、実、と、し、た、く、は、な、く、自、分、自、身、を、な、ぐ、こ、め、の、こ、と、で、自、殺、し、た、と、ワ、ウ、を、言、つ、た、と、思、う、別、に、ま、さ、か、ば、つ、て、ら、ど、か、盗、入、を、か、ば、つ、と、か、し、り、ひ、く、て、自、分、を、殺、し、た、こ、と、や、妻、の、う、ら、み、を、認、め、な、い、こ、と、に、自、分、自、身、が、つ、ら、く、思、え、た、の、だ、ら、う、自、殺、し、た、と、ワ、ウ、を、言、つ、く、こ、と、で、自、分、へ、の、情、け、な、う、を、さ、う、い、ふ、こ、と、を、こ、れ、た、こ、と、を、否、定、し、た、か、ら、つ、り、と、思、う、だ、か、ら、自、分、で、自、殺、し、た、と、言、つ、た、と、思、う、。

R (武弘は) 自分は幸に裏切られたと思ひ、と、ま、ろ、く、や、し、か、つ、た、。